

フランスから見た日本のジャーナリズム 鈴木 仁 (元 NHK 福島放送局長、元福島日仏協会会員)

※本文は NHK ラジオ まいにちフランス語「セーヌ河岸便り」No7 より転載

パリ日本文化会館では、フランス人による日本研究の紹介にも力を入れています。その一環としてことし5月、「日本でジャーナリストとして働くこと (Être journaliste au Japon)」と題する講演会を開催しました。

パネリストは、去年、Le dernier empire de la presse -- Une sociologie du journalisme au Japon(「最後のメディアの帝国～日本におけるジャーナリズムの社会学」)という本を出版し、日仏両国において、それぞれ相手国の文化に関してなされた優れた研究成果に対して贈られる「渋沢・クローデル賞」も受賞したセザール・カステルビ(César Castellvi)パリ大学准教授(maître de conférences)と、日本の大手通信社のパリ支局長(女性)、そして元 NHK ジャーナリストの私の3人です。

カステルビ准教授はこの本を書き上げるため、数年にわたって日本に滞在して全国紙や通信社の記者に聞き取りを行ったほか、日本独特の「記者クラブ」や地方支局・通信部を実際に体験するという、ジャーナリストさながらの調査を行いました。

そして、終身雇用制が主流の日本ではジャーナリストである前に、まず「社員」であること、それと関連して、日本では大学にジャーナリストを養成する専門の学部がないため、大手メディアでは採用後に地方支局などでジャーナリストとして育成されていくこと(フランス語で Formation)を指摘しました。また、「記者クラブ」制度によってジャーナリストは官公庁などが発表する情報への独占的なアクセスを持つ一方、いわゆる「発表ジャーナリズム」



鈴木 仁(すずき・ひとし)

東京生まれ。1985年東京大学教養学科(フランスの文化と社会)を卒業後、NHKに入局。長年にわたって国際報道に携わり、パリに2度(2度目は欧州総局長として)、ブリュッセル、ロサンゼルスに駐在。新潟、福島放送局長も務める。2021年7月にパリ日本文化会館の5代目館長に就任。



講演会の様子。右がセザール・カステルビ准教授。

写真提供:パリ日本文化会館

に陥りやすく、情報源との関係が対等でありにくいこと、そして女性ジャーナリストの割合、とりわけ管理職クラスでの女性の割合が欧米諸国に比べて低いことなど、欧米のジャーナリズムとの違いも挙げています。

私の経験を見ても、大学ではジャーナリストとしての教育は全く受けておらず、フランスに行きたいと思って NHK に就職した直後は四国の地方都市で、「サツまわり」と呼ばれる警察取材で記者としてのイロハをたたき込まれました。ただ、東京に戻ってからは国際報道専門の記者として海外と東京を行ったり来たりする生活が続き、国内での取材に特有の「記者クラブ」に所属することはありませんでした。

海外で取材していて日本の取材現場と最も違うと思ったのは、経験豊富なベテランジャーナリストが最前線の現場で取材していること(これらの人たちの中には優秀さを買われてメディア数社を渡り歩く人も少なくない)、そして女性ジャーナリストの数が多いいことなどでした。

今回のロシアによるウクライナ侵攻でフランスのテレビニュースを見ていると、ヘルメットと防弾チョッキを身につけて戦地から中継を行っている女性記者が、男性よりむしろ多いのが印象的です。

古巣の NHK を見ていると、総体的に女性ジャーナリストの数は増えていますし、海外特派員として素晴らしい活躍をしている後輩たちも出ています。ただ、今回の講演会に参加した大手通信社の女性支局長によれば、

彼女のように海外特派員になろうとすると、依然として結婚や子育てなどの課題が多いということでした。

もちろん、「終身雇用を前提とした企業による育成」「第一線で働く女性の少なさ」などはジャーナリズムに限らず日本社会全体に言えることであり、日本企業の雇用形態の変化に伴い次第に状況が変わりつつあります。

また、欧米のメディアがすべての点で優れているというわけでもありません。記者の個性が前面に出るあまり、読者や視聴者に事実を分かりやすく伝えるという基本がなおざりにされていると思えるような記事やレポートも少なくありません。

いずれにしても、所属する組織の名刺に頼らずにいつまでも取材の第一線で活躍する記者や、海外の、時には危険な現場から臨場感あふれる報告を行う女性記者がひとりでも増えることで、より多角的で事実の核心に迫るジャーナリズムが日本で発展することを、OB のひとりとして心から祈っています。

著者鈴木仁様は、NHK 福島放送局長赴任の際、直ちに「福島日仏協会」にご入会いただきまして、社員総会時の記念講演会では、前任地欧州総局長時代に取材した欧州首脳諸氏とのお付き合いや、フランス国内取材時のエピソード等やらを講話され、会員の皆様に分かり易く説明頂きました。またクリスマス会の余興時には美声のシャンソンを披露され参加者を魅了された記憶があります。

今回、NHK ラジオ：まいにちフランス語 10 月号に寄稿された文章を事務局で確認し、派遣元の国際交流基金から現在パリでご活躍の「パリ日本文化会館長」の鈴木様のご了解を得た後、出版元の(株)NHK 出版から、転載許可願の承認を確認して掲載に至りました。鈴木仁様の今後益々のご活躍を福島の地より願っております。

私のフランス語日記 *Mon journal en français*

“Croyez-vous aux fantômes ? Aux monstres humains ? Comment expliquer ces phénomènes ? ” C’est un des devoirs que j’ai reçu de la prof Noémie. Cette fois, je vais vous présenter mes réponses comme ci-dessous.

i . Sur les fantômes. Il y a un haïku de l’époque d’Edo : « Yuurêi-no Syoûtai-mitari karéobana. », en français « J’ai découvert l’entité du fantôme qui était des miscanthus sinensis. », ce qui signifie que « Les gens qui ont de sentiments de culpabilité ou de peur voient même les miscanthus sinensis comme des fantômes ». Je suis d’accord avec ce haïku, mais, d’un autre côté, je ne peux pas parfaitement nier l’existence des fantômes. Car, selon des médias, il y a certaines personnes qui ont vu des fantômes alors qu’elles avaient plutôt des sentiments d’amitié. Je souhaite donc que l’existence des fantômes soit prouvée grâce aux progrès de la science.

ii . Sur les monstres humains. Selon la définition sur Wikipédia, «Un monstre humain désigne, dans le langage courant, un être humain atteint de malformation congénitale, ou d’un désordre génétique, du développement, ou une maladie causant des formes extrêmes de difformité.», les monstres humains existent réellement. Donc, ce n’est pas la question d’y croire ou non. Néanmoins, d’un autre côté, il y a certaines légendes de monstres représentées par des loups-garous dont l’origine vient de la mythologie grecque. Je l’interprète comme ci-dessous.

“あなたは、幽霊、怪人を信じる？これらの事象をどう説明する？”ノエミ先生からの宿題である。今回は私の回答を皆さんに紹介したい。

i . 幽霊について



出典: gooblog leelin サンデー&マンデー

「幽霊の 正体見たり 枯れ尾花」という江戸時代の俳句がある。後ろめたさや恐怖を感じている人はスキさえも幽霊に見えてしまうという意であり、私もその通りだと思うが、その存在を全否定するものでもない。と言うのも、後ろめたさや恐怖感を持たない人、逆に親愛の情を抱いている人であっても幽霊を見た人はいるらしい。それゆえ、将来、科学の進歩により幽霊の存在が証明されることを願う。

ii . 怪人について

ウィキペディアの定義によれば、「怪人とは、先天性奇形、遺伝的障害、発達障害、極端な奇形を引き起こす病気に苦しむ人間を端的な言葉で表したもの。」であり現実的に存在するわけだから信じるか否かの問題ではない。然は然り乍ら、ギリシャ神話を起源とした、狼男に代表されるいくつかの怪人伝説がある。狼男は満月



出典: ビクシブ百科事典

モン・サン・ミッシェル

昔、ドイツにいた頃に同僚から「夏休みには絶対モン・サン・ミッシェルには行くな」と言われたことがある。その季節は周辺の渋滞が半端でないからである。しかし私の住んでいたドイツの街からモン・サン・ミッシェルへクルマで行くのも遠いので、残念ながら行く機会は無かった。その後も行く機会に恵まれなかったが、会員の皆さんは行かれた方もあると思う。モン・サン・ミッシェルは 8 世紀に大天使ミカエル(仏名ミッシェル)のお告げを受けて、この地に礼拝堂を建てたと言われる。

イギリスにもモン・サン・ミッシェルに似たところがある。その名も Saint Micheal's Mount といい、丁度、モン・サン・ミッシェルを英語に直訳した名前である。コーンウォール州にあり、地図でいうとイギリスの左下の方向である。干潮から中位時には英国本土と人工の花崗岩の土手道で地続きになり、歩いて渡ることが出来る。12 世紀頃に修道院が建てられ、17 世紀以来城と礼拝堂が出来ている。本家はどちらかというと城塞のような印象であるが、こちらはもう少しじんまりとしているようである。ここも旅行を計画したことはあるが、まだ行ったことはない。



本家モン・サン・ミッシェル



Saint Micheal's Mount(英国)



壱岐のモン・サン・ミッシェル

日本にもモン・サン・ミッシェルがある。長崎県の壱岐島は「魏志倭人伝」の王都といわれている。住所は長崎県であるが福岡市からの航路が一番近い。この島の波静かな内海湾に浮かぶ小島がある。ここが「壱岐のモン・サン・ミッシェル」といわれる小島神社である。恋愛成就のご利益があるという。ここを訪れた時はその日の干潮時間より 4 時間経過していたが、島へ向かう砂浜を歩くことができた。しかし島の周囲は潮で満ちており、お社のある山頂へ上ることができなかった。本家に比べるとはるかに規模は小さい。その日は他に誰も観光客はいなかったが、とても幸せな気分になることが出来た。 土屋敦雄(会員)

On dit que le loup-garou se transforme les nuits de pleine lune, d'humain en loup. Le loup est connu comme étant un animal dangereux. Je pense qu'on s'est inspiré des affaires d'une personne avec une double personnalité, qui est normalement douce mais qui commet des crimes horribles en changeant soudainement de caractère, comme dans « L'Étrange Cas du docteur Jekyll et de M. Hyde ».

<Un fantôme ou un monstre humain ?>

N'importe qui connaît « Le Fantôme de l'Opéra ». L'histoire se passe dans l'Opéra de Paris à la fin du 19ème siècle, où une rumeur circule parmi les membres de la compagnie de théâtre : un fantôme à la voix d'ange y serait apparu. C'est en réalité Erik, que l'on appelle "fantôme" mais qui n'est pas encore mort. En effet, une jeune chanteuse orpheline nommée Christine Daaé a aperçu son visage déformé, loin de ressembler à celui d'un être humain.

Si Jacques (René) Chirac, l'ancien président, qui avait une connaissance approfondie de la culture japonaise, était là, il aurait écrit un haïku comme cela :

« Le Fantôme de l'Opéra, j'ai découvert l'entité, c'était un monstre humain nommé Eric. »

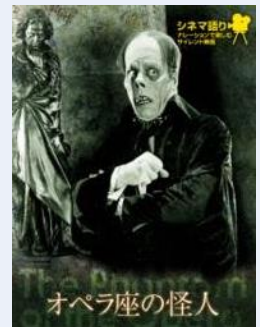
D'ailleurs, est-ce qu'on peut appeler Erik « un fantôme »? Plutôt, Erik, qui est un être réel, devrait être appelé "monstre humain". D'ailleurs, la traduction japonaise de « Le Fantôme de l'Opéra » est « Opérazza-no Kaijin », traduit littéralement par « Le monstre humain de l'Opéra ».

KAWASAKI Yutaka

に人間から狼に変身したといわれている。狼は危険な動物として知られており、普段は穏やかな多重人格者が突如人格を変えて悍ましい犯罪を犯すジキルとハイドのような事件から狼男の着想を得た、というのが私の解釈。

<幽霊それとも怪人？>

誰もが知っている「オペラ座の怪人」、物語は 19 世紀後半のパリ・オペラ座。劇団仲間の中で天使の歌声を持つ幽霊が現れたと言う噂が流れた。オペラ座の幽霊と呼ばれていたものの正体はエリックであり、彼は死んではない。その実、若い孤児の歌手クリスティーン・ダアエに顔を見られて



出典: Books Kinokuniya Official Channel

いる、人のものとは思えないほど不格好な顔を。日本文化に造詣の深いジャック・シラク元大統領がそこにいたならこんな俳句を詠んだに違いない。

“幽霊の 正体見たり 怪人エリック”

因みにエリックを「幽霊」と呼んでいいのだろうか？ 実在している彼は怪人と呼ばれる方がふさわしいのでは。なお邦訳は「オペラ座の怪人」であり、文字通りの仏訳は「Le monstre humain de l'Opéra」である。

(フランス語会話教室受講生 川崎 豊)

今回は、佐藤敏雄さんお願いします！

幸福の王国・ブータン 2014年6月の旅行を回顧

＜GNPよりもGNHが大切＞

国民総生産(GNP)よりも国民総幸福(Gross National Happiness)が重要だと提唱したのは、第4代ブータン国王(現第5代国王の父君)である。1989年10月25日付読売新聞によれば、ブータン王宮での国王との会見の席上、同紙記者の質問に答えて、「五年、十年ごとに自分たちの暮らしを振り返ったとき、少しずつ良くなっていると国民の多数が考えるかどうか」を指標にすべきであり、「調和のとれた社会発展が重要」なのであると。

また、国王即位25周年の1997年4月には、毎日新聞の質問に書面で回答され、「経済発展なくしては、国家主権も思想の自由も保障されない。しかし、環境保全や、文化的独自性維持との調和のとれた経済発展であるべきだ」。

この理念は今あらためて注目されている。「持続可能な社会」、「地球環境問題」を考える上で、「幸福度を社会指標」とすることは大きな意義があるとし、今年2022年、第4代ブータン王国国王に、ブループラネット賞が贈られた。(ブループラネット賞は、公益財団法人旭硝子財団が創設した、地球環境国際賞)



ジグミ・シンゲ・ワンチュク第4代ブータン王国国王陛下
(写真は朝日新聞より)

＜ブータン王国へ＞

国営ドルク・エア機は、ドラゴンを尾翼にのせて、パロ空港へと着陸態勢に入った。狭隘な谷間の、一筋の流れに向かって降り立つような、熟練パイロットでさえ緊張を強いられるというブータン国際空港。ドラゴンは無事に「幸福の王国」に降り着いた。ここはすでに標高2300メートル。訪ねたのは2014年6月。王国の玄関口で待っていてくれたのは、二人の男性ガイド。「ゴ」という民族衣服を身につけ、一見ドテラを膝までたくし上げ、ハイソックスをはいたようだ。親しみを覚える。(男性は「ゴ」、女性は「キラ」という民族衣服を公共の場では義務として着用。)

＜首都ティンブーへ＞

マイクロバスに乗せられ、ティンブーへ向かう。周囲の景色は昭和の日本の農村のようだ。田植えの済んだ田んぼには、青々とした苗が整然と並んでいる。自分の田舎に帰った気がする。途中で何度かバスがとまる。村毎に検問がある。その度旅行者の名簿を見せ、係員が確認する。他国の者をゆるゆると通しはしないぞといった「関所のお役人」の感じ。この国は観光客の勝手気ままな行動を許していない。

＜ティンブーの街＞

静かだ。往来を歩く人も車も、ほとんど見かけない。犬はいる。あちこちにたくさん居る。犬は食べ物をあさったり吠えたりもせず、思いのままに歩き、寝そべっている。ここは犬も住民なのだ！と気づく。片耳の先が少し欠けているのは、去勢のすんだ証だそう。四辻の中央に、人が一人立てるくらいのボックス

	人口(千人)	面積(k㎡)
ブータン	727 (2017年) 772 (2020年推計)	38,394 (2020年)
日本	126,146 (2020年)	377,976 (2020年) 九州本島 36,782 (2021年)

総務省統計局「世界の統計 2022」より作成

GDP(国内総生産)2019年		
	ブータン	日本
1人あたり	3,361(米ドル)	40,063(米ドル)
実質 GDP	2,425(百万米ドル)	4,553,028(百万米ドル)
名目 GDP	2,564(百万米ドル)	5,082,466(百万米ドル)

「国際連合世界統計年鑑 2021」より作成

がある。反屋根の美しい、極採色のボックスは、警官が手信号で交通整理をするためのものらしい。以前信号機を取り付けたが「景観上よろしくない」と撤去されたとか。



＜農家見学＞

どの家も立派な三階建てで、造りも落ち着いた色調も同じ。一階が農機具、家畜のスペース。外階段を上がって二階に行くと、広い板の間。仕切りは全く無いワンルーム。隅に炉のある台所。一方の隅にふとんがきちんとたたまれて重ねられている。押入れはない。椅子、テーブルといった家具も一切無い。私たちは車座になって座った。となりは仏間。うす暗い板の間と違って、きらびやかな極彩色の仏壇が、部屋のほとんどを占めている。この立派な仏壇に位牌は無い。先祖をまつるものではないのだそう。この国には墓が無い。だから墓参りもない。火葬後は遺灰を川に流し、輪廻転生を祈る。水葬、鳥葬も未だ少し行われているとか。

＜食べ物のごと＞

米、山菜、肉(魚は食べない。川に遺灰を流すから。)など日本でなじみの食材ではあるものの、その調理には大量のとうがらしを使う。特に「エマ・ダツィ」という一品は、とうがらしをチーズで煮込んだもので、その辛さは想像を超える。この超絶激辛を、ガイドの男性はごはんにたっぷりのせて、指で器用にまわめて口に運んでいた！片手で寿司を握っているようだ。箸、スプーンは使わない。

＜最後に子供たちのこと＞

どの国へ行っても子供の笑顔ほど素敵なものはない。短パンにTシャツで遊んでいた小学生くらいの男の子たちも、家へ帰る時は、「ゴ」に着替えるようだ。「こんにちは」(日本語で)と声をかけたら、何と英語がかえってきて、たじろぐ。少年たちはニコニコしながら近寄ってきて、「どこからきたの?」「名前はなんていうの?」「なんさい?」と次々に質問してくる(英語で)。こちらは中学英語のレベル。冷汗。後で聞いたところ、授業は英語で行われているとのこと。

それにしても「ゴ」を着た少年たちの何とかかわいいこと。陛下、「子供の笑顔」が「国民の幸福」なのではありませんか?

中脇ゆき子(会員)

